

# 『征清戦袍餘滴』(一)

——山岡金蔵中尉の日清戦争従軍日誌——

井ヶ田 良 治  
山 岡 高 志

は し が き

I 緒 言

II 明治二十七年日誌

十月二十一日

十月二十二日

III 明治二十八年日誌

(本号)

(以下 次号)

は し が き

執筆者山岡金蔵は一八六六(慶応二)年に伊勢國久居藩(津の藤堂家の支藩)百四〇石取の藩士山岡景光の長男として生れ、同郷の中村雄次郎陸軍少将の知遇をえて、陸軍士官学校にはいった生粋の軍人である。その履歴書下書に

よると、一八七一(明治四)年には藩鬻に入り、翌年には久居小鬻に転入、修学後津の中内樸堂について漢学を学び、一八八〇(明治一三)年から数年津の土井塾で漢学を中心に数学英学などを学び、一八八五年陸軍士官学校に入学したとある。日清戦争当時には、陸軍中尉で、明治三七年には歩兵少佐として日露戦争に出征し、明治四一年歩兵中佐となり、大正元年予備役となった。

金蔵は、その幼少時の学習歴に見られるように、漢学の素養があり、文筆に堪能で、従軍日誌は、克明な上に、故郷の父宛てにその見聞したところや戦況を、連日のように日記及び手紙に認めていた。帰国後、それらの日記に加えて、保存されていた手紙を書き込み、明治三〇年に整理完成したのが本日誌である。

その日誌原本は、大正一〇年金蔵の死後、令夫人の手で大切に保存され、夫人が昭和五〇年に逝去したのち、孫にあたる木場敏子・山岡高志両氏によって解説を付して保管されてきた。二〇〇五年に防衛研究所に寄贈され、現在は防衛庁の防衛研究所史料室に架蔵されている。旧蔵者高志氏と防衛庁の御好意により、明治二十七八年戦争の貴重な史料としてここに活字化することとした。本日誌は名古屋第三師団第六聯隊編『聯隊戦史草按―全』編纂の際には基礎資料とされたものと思われるが、解説にあたっては、中京大学社会科学研究所の檜山幸夫教授所蔵の同『草按』を参照させていただいた。御協力いただいた各位に厚く謝意を表したい。なお、原文は片カナであるが、緒言を除きほぼ全文をひらがなに改め、必要に応じて当用漢字にあらかじめ、カナの部分には現代風に濁点を加えるなど、読みやすくした。

## I 緒 言

(表紙)「征清戦袍餘滴 完」

緒言

本書ハ明治廿七八年戦役従軍中ノ日録ニ係ル、其収載スル所遭遇セシ事実ヲ修飾セザルヲ以テ繁簡異同其揆ヲ一二

セス、以テ其当時ニ於ケル境涯・見聞・識量を想知スヘシ、正確秩序アル記述ハ後日歩兵第六聯隊歴史編纂ノ際ニ全力ヲ傾注シタルヲ以テ就テ焉を見ル可シ、故ニ本書ハ当時ノ回憶ニ資スル小説観アルヲ免レスト雖、記念トシテ輯冊シ、三餘消閑ノ一助タラシム、或ハ朱批シ、或ハ雌黄シ間ニ訂補ヲ欄外ニ試ムハ午睡ト擁炉トノ不撰生ニ勝ルモノアラン歟

明治三十年孟夏 柳城ニ於テ

山岡 金蔵 誌

## II 明治二十七年日誌

八月四日 晴

午前十時出師下令あるや、聯隊出師準備書及大隊出師準備施行細則の規定に従ひ、直に出師準備に着手せり

三等患者 八名

宣戦公布の後は何時下令あるやも計られざれば、殊更に注意して成し得る限りの準備をなし居りたるが、恰も各兵をして銃剣術試合を演ぜしむる最中に此下令ありし急報に接し、覚へず一同雀躍して 陛下万歳を唱へたりし

而して兼て命ぜられたる糧食事務上之梱包及決算を

完了せしめ、終りて命課を見る、曰く、中隊長宇野

重喜は補充大隊附に、曹長中川与一は補充大隊附となる、嗚呼是に於て、余が中隊の機関は殆ど全く為

す所に苦しむの景況となれり、而して当聯隊第三大隊副官たりし歩兵中尉川崎四郎は中隊長心得として

教導団教官補歩兵曹長坂根敏雄は曹長として下命ありと雖、種々の細情事項に至りては殆ど余をして悩

殺せしめたりき

八月五日、八月六日、八月七日(以上記事なし)

八月八日 晴

午後四時三十分人馬・充員・要員充足し、出師準備全く完成す

一等患者 一名

三等患者 一名

八月九日

八月十日 雨

午前九時三十分より聯隊長の武装検査を施行せらる、管なりしが、雨天に付、各大隊長に於て大隊各個に検査する事となれり

三等患者 一名

八月十一日、八月十二日、八月十三日

八月十五日 晴

午前七時三十分、在名諸隊及縦列に至る迄悉く北及東練兵場に整列し、閲兵及分列式を施行す

閲兵に先ち師団長中将桂太郎は各將校・同相当官及見習士官を集め、次の訓示をなす

訓示

今般余は

大元帥陛下の命に依り、我第三師団の第一充員及後備軍召集を實行し、既に野戦師団及後備軍諸隊の編成を完成し、之を陛下に上奏せり、諸官、余は当師団長拜命の當時訓示をなしたり、諸官は記憶するならん、即ち余が諸官の生命を敵前に主宰するの重任を實行するの時機は正に近きにあらんとす、諸官、諸官は陛下に盡すの忠節と貴重なる軍紀とを以て、協同一致余をして此重任を全ふせしめん事を勉めよ

明治廿七年八月十五日 於名古屋城北練兵場

第三師団長 桂 太郎

此訓示終るや師団長の発声を以て、陛下万歳を三唱し以て各自の位置に復せり

閲兵は終るや、直に分列式を始む、其隊形は中隊縦隊とす、之を終りて逐次に解隊せり

三等患者 下士 一名

同 兵卒 三十二名

八月十六日、八月十七日、八月十八日、八月十九日、八月

二十日、八月二十一日、八月二十二日、八月二十三日、

八月二十四日、八月二十五日(以上記事なし)

八月二十六日 晴

午後九時二十分旅団司令部よりの通報、左の如し

第三師団野戦隊の残余及後備歩兵第六聯隊(一大隊

欠く)并に後備騎兵小隊は、追て朝鮮国に出征の為

め、来る二十九日より鉄道輸送を以て広島に至る

三等患者 下士二名

同 兵卒二十三名

(朱)「今朝四時継母澄清院遂に好生館の病室にて永眠

せり、出師中にあるを以て喪に服するを得ず、又、時

日甚だ切迫するを以て、已むを得ず、本日午後三時を

以て名古屋市巾下宝周寺に埋葬せり、依て葬儀も極め

て粗なりしと雖、同將校団よりは若干の会葬あり、殊

に 久邇宮殿下より玉串料五百疋を賜る」

八月二十七日

八月二十八日 晴

午後五時三十分聯隊命令に曰く

師団は明二十九日より鉄道にて広島に集中せんとす、

聯隊は別紙輸送計劃表により広島に至り元安川 本

川の間(舎營せんとす

鉄道輸送指揮官 第一 は歩兵少佐岡本忠能

(第一大隊長)とす

同 第二 は歩兵大尉橋本秀則

(第四中隊長)とす

三等患者 下士 二名

余は此日除服出仕を命ぜらる

午後一時大隊長より次の如く命ぜらる

山岡中尉は第二四輸送指揮官の副官を命ぜらる、

依て今より停車場に至り列車搭載等の諸準備を打合

せ置き、尚明日に係る注意と準備とを報告すべし、

但し搭載便宜の為めの略図を附すべし。

(朱)「是に於て直に笹島停車場に至り、停車場司令官

歩兵大尉芦原甫に面會して、列車組立表及輸送上の注

意、搭載上の諸件を知了し、又 駅長□□□□に談じ

線路及列車構造等を実験し簡易なる略図を附して大隊

長に復命せり

本夕は父上及親戚に訣別の宴をなし、且つ後事を托し

金三拾七円五拾銭を懐にし他は凡て家に置く」

八月二十九日 三十日

第一列車は輸送指揮官岡本少佐とす、而して之に搭載したるものは第五旅団司令部第一大隊本部及第一・第二中隊と大行李とす

大行李は午前七時三十分屯営出發、八時四十五分馬匹の搭載に着手し、九時十四分即ち二十九分間を以て全く搭載を終る

歩兵は午前八時中隊各個に屯営出發、九時十五分搭載を始めて十分間にして全く終れり

午前十時十五分笹島發車し午後一時十八分米原着、下車昼食を終へ、同二時十五分同処を發車す

午後八時五十分神戸着、湊川神社に於て夕食を喫す、同所より広島迄は馬匹及荷物の外、乗換を要す、依て同十一時十五分人員搭載を始め、同三十三分に終り同五十七分同所を發す

三十日午前五時四十分岡山に達す、汽車延着の爲め二十五分間内に朝食を喫し六時二十分同所を發し午後十二時五十四分広島着、三時三十分水主町に宿營す

第二列車輸送指揮官は橋本大尉とす、之に搭載したるものは第三第四中隊及第二大隊の第五中隊并に小行李とす第二列車は第一列車の搭載人馬二準じて屯営を出發し及

搭載を始め、其人馬搭載に費したる時間は約二十分とす

午後十二時四分笹島を發し昼食は乗車の儘之をなし、同六時四十五分馬場に着、下車して夕食を喫せしめ、一時間休憩の後同所出發、同十一時三十分神戸へ着、三十日午前二時五分山陽鐵道に乗り換へ同所を發す

午前八時岡山へ着す、下車朝食を喫し一時間休憩の後、同所を發し尾道に於て乗車の儘昼食を喫す、午後二時五十分広島着す、同四時五十分水主町に宿營す

運行中は至る所有志者より盛なる歡迎を受け、就中名古屋・神戸の如きは尤も盛大に送軍せられたり

(朱) 家信 (八月三十一日午前七時於広島)  
本日(二十九日)午前七時家を辞し、継母の位牌を拜し、結束し訣辞して聯隊に至り、出發に関する諸命令を受領す

午前八時三十分、余は第十一号(乃ち第二回の列車)臨時汽車輸送に關したる諸件を領知、且つ確かめん爲めに屯営を出て本町通り伝馬町を経て停車場に至り、荻原大尉を訪ひて輸送表及列車組立表を更に受取りたる

第九号は乃ち第一回列車にして、歩兵第五旅団司令部歩兵第六聯隊第一大隊本部及第一・第二中隊とす、乗組將校は陸軍少將大迫尚敏、歩兵少佐岡本忠能、歩兵大尉徳

田誠一(第二中隊長)、同村山正明(第一中隊長)、同藤林敏正(旅団副官)、歩兵中尉若見虎治(旅団副官)、歩兵中尉口羽清之助(大隊副官)、同山縣駒喜(第一中隊小隊長)、少尉青山忠次(第二中隊小隊長)、少尉石黒鏐四郎(第二中隊小隊長豫備)、少尉青山隼武者(第一中隊小隊長豫備士官)等なり送軍の主なるものは久邇宮殿下、桂師団長及各参謀、県知事時任為基以下の縣官、市長以下中学校・商業学校等の公私学校生徒、赤字社員と将校の家属とす

余は此列車を送る為めに来りしにあらざるも時間上之を送る事となれり、依て大迫少将に謁し継母弔慰料の謝辞を呈せしが、此際とて會葬し得ざりしは遺憾なりしとて、却て丁寧の弔慰を受けたり

久邇宮殿下の家従角田敬三郎は余に告ぐるに殿下に拝辞する事を以てせり、依て聯隊長の許を得て、親しく殿下に謁し、過般玉串料の礼を申し上げしに、殿下の令辞に

出征前に当り母を亡せしは実に氣の毒なり、汝は今より出征すべければ、潔よく功名を立てよ、一時の別は惜しむとは云へ、今回の義征の如きは余も実に共に行く事を望みてありし所なり、唯未だ征途に就くに至らざるは甚だ遺憾とする所なりと云々

余は令辞を承り唯黙涙拝服するのみ、終りに然らば謹てお暇乞を申し上げ枅、他日将さに必ず国恩に報ひ奉らんと申し上げたり、角田曰くに、殿下にも桂閣下より来春に至らば是非御渡海ある様にと申されしが、殿下は殊に今回は御出征に就かれたき御心願にあらせらる云々と、是にて余は殿下の御許を退きたり

午前十時発車の豫定なりしが、事故ありて十時五十分発車せり、万歳の声一時に湧き拍手喝采の間に行進し去れり

此列車去るや、第十号列車乃ち荷物車発せり第十一号列車は乃ち余等の搭載する所なれば、三個中隊及小行李搭載の区處を揭示したり、人員六百八十六名、馬匹二十二頭(内一頭は内田憲兵少佐の分とす)彈藥四万八千発とす

乗組将校は歩兵大尉橋本秀則(第四中隊長)、同桐淵直(第五中隊長)、歩兵中尉川崎四郎(第三中隊長心得)、同那須仙太郎(第四中隊小隊長)、同山岡金蔵(第三中隊小隊長)、同木村重行(第四中隊小隊長)、同市川堅太郎(第三中隊小隊長)、歩兵少尉佐藤弥太郎(第四中隊小隊長)予備歩兵少尉松岡恭介(第五中隊小隊長)、同磯部芦丸(第五中隊小隊長)、見習士官野元彦二(第三

中隊)等とす

午後十二時二十分名古屋を出発す、此時は車内にあり、送軍者に黙礼しつつ汽笛の声万歳の声と共に行進せり、(註、父上より日丸扇を受けして之を以て家君の送軍を受けたり)

午後十二時四十分一の宮駅に達す

小休み中、人民は盛に送軍し氷を送りて車中人の爲めに供せり、殊に万歳を唱へて将さに発せんとする汽車中に投入るゝまで充分に送れたり、汽車中において氷の拾ひ勝ちをなすも亦一笑

十二時五十分 木曾川駅に至る

尾濃の境、愛岐の界にあり、陸軍万歳の旗を立てて送軍せり、

木曾の川濠々として白帆之に点綴す、風光の媚雅、人をして覚へず万歳を唱ふるの雅懐あらしむ

午後一時岐阜の南端なる新加納に達す

金華山は北に聳つ、斎藤道三龍興之旧城址に属し、稲葉神社模糊の間に見るが如し、長良川の鮎忠節橋の涼も亦尋ぬるの限にあらざと思はしめたり

此地岐阜市に県廳あれば、必ず一二の送軍者はあらんと思ひの外少しもこれなし、潜に士氣の盛衰を感

ぜしめし

午後一時半 大垣に達す、休止三十分

大垣は彼の関ヶ原の役、福島正則の占領せし所、中古、戸田伯之に居り、戊辰の乱に奏効多し、嘗て白河(奥州)に行軍の際、大垣藩士の墓を弔せし事あり、古来の士風今尚見るべし、乃ち此地の歡迎人、岐阜県安八郡長從七位勲五等八木信守、大垣町長戸田銃吉、大垣実業青年会、大垣報国義会等無慮二千人あり、嗚呼余之を思ふ、前年機動演習の時、陸軍少将乃木希典閣下枝隊に属し、当聯隊長塚本中佐殿の部下にありて、此地に宿し、以て赤坂及垂井方への敵に当りし事あり、今日征途之を覚へ出し今昔の感なき能はず、昔者家康大垣を取りて関ヶ原に勝ち、今は今日大垣を通りて清兵を討す、其他日の奏効蓋し今に於て期せらるべしと独り自ら頷せり

午後二時出発、是より地漸く高し、汽罐車三輛を附す、陸軍万歳の声に送らる

愛すべき大垣西方の一小村民は来(桑力) 耜を挙げて万歳を呼ぶ、心神殊に快然

養老山の菊水樓を同山腹に望み、炎天潜在瀑遊を思ふ御勝山垂井の東にあり、山は旧によりて蒼々、東照公凱



歌の時想像するに余りあり

垂井駅は国旗十数旒を建て、土民拍手万歳を呼ぶ

是れより関ヶ原となる、土地漸く山地となり、松尾山南

宮山今尚ほ古態を失はざるを知る

嗚呼此二山、乃ち東軍の勝を制する所以にして、小

早川・毛利の向背は取りも直さず治部をして一大悪

人とならしめたり、家康の智三百年の基、今日征清

義挙に於て深く鑑みなかる可けんや

此地の村民は日丸の旗を振り翳して万々歳と呼び送軍せ

り

関ヶ原に入りて三町強(位もあらんか)にして道の北側

に徳川家康進級実○○標○○との木杭あり、関ヶ原古戦

場たるを記念するものならん

徐ろに当時の大勢と戦況とを考へ出し天寒日暮のと

き往々鬼哭するあるやを感じせしめたり

午後二時四十分伊吹山に至る、此辺地高くして山の高き

を感じず

艾の名物なり、試に之を買て豚尾漢に与へんと、一

座の諧語哄然良久し

長岡に至りて、岐阜縣を謝する事となれり

思ふに、大垣の外は岐阜県は歓迎送軍者なし、人民

は此遠征を知らざるか、地方官は此義挙を蔑如する

か、全縣殆ど挙りて此くの如きは抑も所以あらん、

敢て其理を聞かん

米原はマイバラと読む、滋賀県に属す、凡そ一時間休憩

して夕食を喫す、滋賀県赤十字社委員等犒軍休憩所を設

け茶菓の饗應により盛に歓迎せられたり、砲兵大尉田原

鑑一此地停車場司令官とす、尤も尽力を見る、発車に臨

み参事官渡辺義謙の發唱を以て陸軍万歳の声に送られた

り

午後四時四十五分琵琶湖を右に眺めて米原を去り、同五

十七分始めて彦根城を湖の端に望む

彦根に着し八分休憩す、見送り人もなければ、万歳を云

ふものもなし、思ふに送軍者は皆彦根に止まらずして米

原に至りしものならん、何にしる寂寥の感は免れさりき、

或る人一首を吟し

萬歳の声もなければ水もなし彦根の城に主の無れば

彦根を去りて四五町にして四五才の小供裸跣にして独り

万歳と呼ぶ、依て又

童らが心もなげに唱へける祝いの声ぞ誠深けれ

一同之を讀みて帝国男子の膽を思ひ出したり

是れより鈴鹿山を望み愛知川を渡り能登川に至る、千本



松と名付くる山あり、山は錐体のごとく、松は画くが如し、殊に晩景の湖光を添へ来るに至りては、実に箕踞して傲を寄するの快を思はしむ

嗚呼余之を懐ふ、昔年伊勢辛州寄に遊び、白砂の間青松の下涼を掬し杯を弄せし事あり、又小阿坂の瑞岩寺に遊び、人造の小池に對し其風雅に聯詩を試みし事あり、今や是れ征途に属し一碧の大湖と絶美の松籟、之を空しく瞬間汽轢の中に看過し去る、閑の榮なるか忙の榮なるか、草頭一滴の身、俯仰感余りありと云ふべし

是れより逢坂の隧道を通過す、穹窿洞然長廿八町と算せり

戯に蟬丸の歌を思出し、  
これや彼の行くも帰るも別れても

国の榮へる逢坂の関

又太平記に

よき名を留めん逢坂の関の清水に身を清め

末は北京に打出ての花 云々

と此くの如く口ずさむ、是れより互に話繁くなり、互に笑い吻雑吐し、時々滑稽戯をなして進む、胴卷の内に銀貨を縫着けたるを取出し白鉢巻となして、さらば来い豚

尾の者共と、軍刀を構へし威儀の凛々しき桐淵大尉の一興は、事の不意に出で、甚だ興味ありし、此豚尾よりして遠山中尉は豚尾語を始めんとて、チューシュー ツァイナル、乃は酒は何れにあるやの一語を吐きしより、頻りに此語を用ひて笑談したりけり

露命無前後 何処曝此骨

八幡に至りて鈴鹿山は全く我を送りて辞し去れりと覺へず語を漏らし、是にて全く我生産地の山水と訣す八洲に至れば三上山漸く我眼に近けり、此麓を廻りて草津に向て進む

三上山富士の形になぞらうて 軍人等の威勢増すか

な 遠山中尉 草

君の為め月日鍛ひし我太刀の日のてる下に光り増す

らん 桐淵大尉 草

三上山高しといへど丈夫の尽す心に及ばざるらん

死する後三上(御身上)の山と貽したし近江富士

(逢ふ身は不時)と人は言ふとも 金蔵 草

三上山は形ち富士に似たりと雖、七合以上には青松あり

山麓は却てこれなし

或人戯て曰く、支那人の頭に似たり恐らくは後方に

辮髪の如き水源谷あるならんと依て大笑

草津は東海道と中仙道との交差点にして可成大なる停車場あり、是れより二個の小なる隧道を過ぎ午後六時半、彼の有名なる瀬田の大橋・小橋を見る、百足山は此二橋の間に旧蹟を存す、怨むらくは隔絶しあるを以て、橋の如何と藤太の功績を親睹する能はず、石山の風景は夕景の淡濃中にあり、風色愈美にして日愈蒼然、嗚呼悩殺せしむるもの独り操觚者のみならんや

午後六時四十五分馬場(マンバと云)に着す、大津第九聯隊より草生歩兵・西田少尉(源吉)来り居れり、余を見て一礼す、余は其顔を記して其人を記せず、日本赤十字社々員出張し大に送軍の好待をなせり、是にて下車夕食す、食堂は停車場を去る凡そ二丁今其樓名を忘る、湖に臨み市(大津)を瞰め風景曠然漁火の明滅市街の遠近爽快なり、優々如たり、食卓は新らしく作られ、兵卒、下士、将校と各別室にす、牛肉、蒟蒻、梅干、沢庵漬、瓜粕漬を薄板或は竹皮に入れて列陳せり、好待の後、又万歳の声に送られ五十分休止の後発車す

大谷のトンネル長十町計り、大谷停車場にて水を喫す、水質尤も良し、此地は山間の一小宿なり、知らず前後数町にして太市のあるならんとす、

山科は大石良雄の古蹟地なり、知らず良雄は無為流連せ

しか、人民は塩茶塩湯を以て好意を表せり、汽車中の渴、依て以て医せり、知らずカッポレを踊りて拍手するの好意はなかりしや呵々

午後七時十分、右前方の山上に火あるを認む、問はずして稲荷山なるを知り、又伏見なるを知る、誰やらん、祈る所は何の為ぞ、我々一行も亦国家の為めに大に祈りつゝ、進む

人声漸々喧しく、人家漸く稠密、問はずして京都に近きしを知る、鴨川一帯涼風却て暖なり、万歳の声河中河岸に湧き拍手喧囂々頗るお祭りの山車となりし感あり

京都の停車場には大隊区司令官、赤十字社支部委員等看護婦まで出て居れり、軒提灯は満ちて炯々、湯茶氷等用意周到なり、万歳の声は時々湧出て、流石に三府の一かと感じしめたり、赤十字社支部幹事西村七三郎、犒軍委員従七位清水公敬、同京都府属高木凌等尽力せしを認めたり

午後八時二十五分に発車す、是れよりは最早夜半となり、漸々寝に就くものあり、向日町山崎の関門も半記憶の中にあり、高槻(午後九時十分)茨木(少し休む)を経て大坂に達せしは十時なりし

大坂にては定めて京都の如く盛大なる送軍あらんとは預

期せし所なるにも係らず(内々御馳走でもあらんと云ひ居りしに)思ひの外の冷淡にて、独りの我一行の爲めに湯茶を与ふるものなく、ある所の水は殊更に悪し、是は出迎人等ありし由なれど、此列車は此地へ立寄らずと聞知し、赤十字社委員等用意なしたれど皆引揚げたりと、然れども大坂は薄情なり、自分の師団が出師せぬとて冷遇せり等と不平の声一時沸出せり、

是れより神崎・西宮・三の宮等を経過せしが、左に半暗茫漠たる海面を眺めて半は眠りつつ進みたり、但し西宮にて飲水を得たるは駅長の好意を謝す所なり、是れより二個の隧道あり、住吉を経て亦隧道あり、三の宮にて万歳の声に目を覺したり

午後十一時三十分神戸に達す、此地にて山陽鉄道と乗換へをなすを要するを以て、馬匹荷物の外凡て客車は乗換へをなす、依て二時間の休憩をなせり

此地は、我一行送軍の爲めには最も盛んなる事なりし、先づ停車場には日本赤十字社兵庫支部犒軍所と記せる標札を立て、湯茶水の用意より医師・看護婦迄一同整列し、電灯提燈を以て赫赫白昼に異らず、一同下車するや砲兵大尉田代種艶は停車場司令官として、此人の万事周旋を受けて楠公神祠に預けて設けられある休憩所に至りたり、

途中は見物堵の如く両端の家屋は電燈・祝燈・国旗交互し、殊に数層に作られたる西洋造りは各層火を点して燦爛眼を奪ふ、一行は悉く眼を新らしめ、勇ましく楠公神社に至れば、社前に軍樂隊は樂を奏し、陰陽上下五音調和、餘韻朗々たるが如く嬾々たるが如きは最も不意の歌舞たるの感あらしめたり、社内に入れば、直線に一新假舎を設けて下士兵卒の食卓と榻子とを備へ、将校は左側の家屋を以て之に充てらる、氷水、茶、菓、等を一兵卒毎に寄送し、且つ遠征の意を慰めたり

余は直に祠宇を拜せんとし之に赴く、一神官来りて余を導きて階下に至らしむ、余はたちまち楠公忠死の當時を追懐し、徐ろに血涙を濺きて英魂を仰欽し一拜再拜三拜するとき前導者已に去りてあらず、別に一神官あり奥まで余を案内し、且つ守り札として湊川神社の符を与へたり、余は之を受け礼して、帽中に納め、且つ曰く、以て忠魂を頭中に守護せられん事を祈ると、依て辞し更に庭内に彷徨する際、前神官又余を案内し、嗚呼忠臣楠子之墓に謁す、碑今は大に缺損し修理しあり、然れども石は朽ちて名は残る鰲上の墓表は千古滅すべからず、墓下の精骨は万古突々たり、嗚呼余中尉の身能く此心得なくて可ならんやと感泣巖然墓前に残し拝辞して去る、余は已

に他に此境内に求むるの観なき者と信じ將校休息所に帰り来れば同僚曰く、君を尋ね来りしものありと、余は其何人なるやを訝かる、少時にして岡崎亀雄余を尋ねて来る、一身互に啞然たり、同人は余が郷里の士にして学年共に長ず、今神戸税関に在勤す、同人と袂を東京に分ちてより七年、毎歳僅に一晷息を通ずるに過ぎず、而して羈旅茲に會す、奇と云ふべし、依て麦酒二壘を傾け相共に健康を祝す、同人の老嫗は殊に余の眷愛を受けし所、乃ち直ちに約するに余が写真の家にある者を送るべきを以てなり、是れより談愈々故郷に移り、又一身の慶弔に及ぶ同人曰く、自分も本年六月十八日妻の喪に逢ふと、余曰く我も亦出発前継母の死を送れりと、既往の談竹馬の遊、一笑一顰同人余を拉して境内に散歩す、既にして時間通り来るを以て相別を告ぐ、同人曰く、余は神戸下山の手通七丁目に余年を送る、君は将さに万里遠征の途に上る、唯期す国のために自愛せよと、依て停車場まで見送り来れり、

余は乗車諸準備を終りて上等客車に入る、同行は橋本大尉、那須中尉、木村中尉、佐藤少尉、遠山中尉とす

家信 八月三十一日午後一時広島にて

神戸にて岡崎亀雄と共に停車場に至り山陽鉄道に乗り換

へしが、歓送人の一同雷の如き陸軍万歳帝国万歳の声と共に汽笛は已に発走せり、時に午後二時三十分なりき、嗚呼これにて余が一行は生前の盛葬を受け充分の愉快と満足と感ぜり、是れより他に求むる所なし

一小隧道を経て兵庫に達す、停車場には松火を以て明を取る中々古風なり、是れよりは暁眠靡すべからずと理屈を着けて車中に一睡せしかば、須磨の景色高砂の松も何れにありしやは知らざりし事こそ残念なり

三十日午前四時姫路に達す音楽會長香山傳次の一組は軍樂を奏して送軍せり、音楽を曙曉に聞くも亦一段の興なり、或曰く、半は面白し半は眠むたし、又曰く、喧しいではないか、眠むられずと、嗚呼余も平常家にあるときは常に感ずる所なり、此地にても万々歳の声を以て送軍せらる、

午前六時半備前國和氣郡三石駅に至る、トンネルあり、長さ十町計り有名なる舟坂山を貫きしものなり、中々大工事と云ふべし、怨むらくは下車して一觀するの間なきを

舟坂山は児島高德兵を挙ぐる所なり、此近傍の地形の適否は今一觀を以て評する能はずと雖、人民の一般に義氣に富むる風あるを見れば、又以て當時を想

像するに足る、彼の地霊にして人傑なりと云ふ語あり、此地他日果して如何

此近傍は殆ど急峻尖筆の如き山をなし、一山越ゆれば又一山と云ふ趣あり、森樹蔚々、蓋し了伯の遺蹟なるか

有志者供茶の饗応を受く、同村の西に小社あり、曰く是れ児島高德を祭る所と、其下に大戸夏あり、輪魚亦燦麗、曰く是れ御巡幸のときの行在所たりしと

送諸公遠征等の文字を記したる旗を立て、万歳の声を以て送迎せしは、備前和氣郡吉水村協和社の有志とす、田舎としては愛らし、又神皇皇后とか由加神社とか記したる幟に国旗を交叉し、或は祭礼の提灯を出す等、以て国民義氣の激する所を徴するに足る

和氣駅は和氣清磨の産所か配所か、何にしる一の縁故あるらしく感ぜり、此近傍の山脈は大抵禿童にして赭土なり、地は少々廣しと雖も、四辺の碧重は尚甕底にあるを知らしむ

和氣駅の西端に和氣川あり、川幅約二百米突、此付近の風光は最も開暢し、殊に曉烟正に散ぜんとして、緑芽露を惜むの爽涼は、我一行の困眼をして全く攪破せしめたり

備前徳利の製造本元は多く瀬戸付近にありと云、此地戸数三百計り山腹によりて居を占む

岡山に達せざる五マイル長岡駅と云、是に至て岡山城の天守閣を望む、恰も上野山より名古屋の城を望むの感あり、而して其少くも早く之に至りて觀を廣くせんと思ふ程、汽車の進行緩慢にして、鉄橋を渡り、先月大水の爲めに毀落荒廢の跡を眺めつゝ、午前八時岡山に達せり

此時鉄橋修理未だ竣らず、依て假橋を渡れり、潜に之を思ふ、嗚呼去月幾多の人畜を害したるの跡ぞ、其流離失産徒に彷徨せしむる、此川の水こそ真に不忠と云ふべけれ、了伯の故智を以て夏禹の蹟を逐ふ事の何ぞ晚きや

岡山は其名よりして見れば高原の如しと雖、実は全く之に反して平野の中央にありて恰も美濃大垣の如し、市街殷盛にして人口二萬以上もあらんかと思はれたり

岡山の送軍は神戸以西の盛大なり、市長小田安正は有志総代として各人にカステラ(パン)を送り、岡山縣書記官坂本釗之助、收税長浅井元、医学校長、典獄、病院長、薬剤長等交々刺を通じ勞を稿ふ

何れも皆赤十字社員にして頗る熱心奔走せり  
此地にて朝飯をなし昼食を受領す(牛肉、蓮根、大根漬、

紅薑等なり)

或戯れて曰く、好下物怨むらくは、一杯の酒なしと、或曰く、ギューと困りた者だと、或曰く、余は大根漬の香に困ると、或曰く、シヨーガ無いと、依て哄笑、蓋し各人の菜にあるとなきと多きと少きとあり、故に此戲言を発せしなり、或戒めて曰く、神戸の甘味を覚えていけないよと

午前八時三十五分此地を出発す、見送り人山をなし、万歳拍手の声甚だ盛大なりし、

此地に於て輸卒村田才之助馬蹄傷を受け眼上に裂傷を受く、赤十字社員看護婦等治療尤も敏活なりしは一層感激せし所なり、庭瀬(ニワセ)の東南方一里に陶器窯元あり、黒煙の天に漲るを見る

備中倉敷(クラシキ)を経て二十町計りにして汽車退歩を始む、是れは兵卒の窓戸を開きし為め危険を慮りしによる、依て又十分間を後れて進行せり、進行中兵卒と雖も尤も是等は注意せざる可らず

花岡を経て一隧道あり、而して備後福山町に達す、此地は一の城下なれば戸数も二三千あらんか、其天守閣及城樓は大破して僅に形を存するのみ、恰も大垣城に彷彿たり、警部大迫平造、深津沼隈安那郡長等は赤十字社員を

率ひて出迎へ土地柄にも似ざる大優待、殊に郡長の如きは自ら手桶を取りて兵卒に湯茶を供せし如きは、大に他の観者を感じせしめたるが如くなりし、諸君万歳帝国万歳の声にて送られたり

松永駅以西は海辺に属し塩田の多きを見る、尾の道、糸崎間にて汽車中昼食をなす

或戯に、それ見よ、酒が欲しいと、或曰く、水瓶湯を満さずと、或曰く、箸なしと、宛然一場の餓鬼世界なり、或曰く、汽車中已に戦地行軍の能き経験なりと

三原(ミハラ)城は今は唯石垣のみ、人事の変遷何れの処か同じからざらん、安芸國豊田村の西に本郷村の停車場あり、郡長村長等三々伍々刺を以て送辞を述ぶ

是れより三四丁隧道を経て河内村に至る、赤十字社員及村長等各出迎に來り送辞を述ぶ

此地を去りて一小河に至れば一老人白髪にして禿、一小童を携へ川原に跪し、合掌して我を拝す、我一行為めに帝國万歳と呼びし、彼等三拜し合掌するのみ、依て思ふに此老人は必ず骨肉の親にして征清の途にあるものあるならん、乃ち迎へて謝意を表せるならんと、一座感を同くす、嗚呼日本人民の敵愾心に富める、夫れ此老と此童



と此僻隅とまでに普及せる哉、壯年男子死せば則ち己まん、生ある者誰かは國に報ゆるの好時機たるを知らざるべけんか、豚尾漢百萬ありと雖、何ぞ恐るゝに足るべけんや、嗚呼帝国万歳万々歳

六個の隧道十六の屈折点に隋氣を生じ、瀬野(セノ)海田市(カイダイチ)を経て午後三時廣島に達す、此間人民の家屋は可成清掃にして殊に蓋瓦は悉く皆薬品を用ひ、恰も常滑焼に薬品を塗せし如くなれば、赤色中白光の反照をなし、炯々として甚だ美觀なり、聞く所によれば大に堅瓦なりと、それ必ず然るならん

廣島停車場は廣島市の東北隅にあり、恰も名古屋の笹島に於けるか如く、市中と隔る事約四五町、従来練兵場たりし事ありと、今は新設普請中にて造構の大規模の宏は大坂・神戸の次ぎにあり、他日完成の日は実に目を驚かすべき者たるならん

廣島市は浅野侯爵の旧鎮にして、三十万石以上の城下なるを以て、人口繁盛の度も名古屋に多く譲らず、屯営病院・県廳・郵便・電信局等の官衙は市中の巨觀とす、其本町通りは一般に家屋充実し、商買の状繁昌の風を見る、但し道路甚だ狭くして、為めに清潔と云んより、むしろ混雑と云ふに近し、河川掘割等縦横し、殊に西南部は全

く数個の島状をなし、東京市深川の如き地勢をなす、乃ち運搬上は以て大に利ある所多しと聞く

我が一行は廣島停車場に下車し、本町通りを取り午後四時四十分始めて水主町に達し、可兒久成方に寓する事となれり、此地へは先發として第二中隊附中尉島田愛信の宿舎割をなしたれば、諸準備全く欠くる所なかりし

当地諸物価極めて高價にして、氷一斤五錢にして名古屋の半分より少し位大なり、故に先づ三倍の高價なり、白米は一枘に付十三錢の由、是れ又法外の事なり、夏蜜柑一個七錢にして平生の倍なるよし、尚此模様にては一個十二錢にも至るならんと噂す

此地には幸に歩兵第六聯隊第九中隊にて一等軍曹奉職せし、石光頼太郎と申す者あり、当時第五師団の用達をなす、此男知人なれば大抵名古屋より一割高位にて買ひ来り呉れ、万事甚だ便利を感じ、何にしる羈旅、殊に征途にありては兎角金力に限る事多し、我々一行の如き鐘牛の者にありては、一円の者も二円五十錢と云はれても買はざる可らざる事多し、此時一文錢なければ何事もなし得ず、之を見掛ける商人の心こそ実に狡猾なれ、敏捷なれ、再言すれば実に不忠驚くに堪へたりと云ふべしに豊橋の諸隊は皆出發せり、聞く皆元山津へ向ひたりと、



砲兵も工兵も一校隊となりしものと思はる

八月三十一日 晴

我出発すべき港湾は宇品とす、宇品は廣島の南一里にあ

廣島滞在

り、前知事千田貞暁の家産を擲ち築港せし所なり、

旅団司令部より左の通報を受く

安藝の宮島は廣島の西南七里にあり、何れ不日舟中より

第三・第五師団を以て第一軍を編制せらる

拝見する事とならん

本日支隊長陸軍少将大迫尚敏より次の訓示あり

我一隊の出発すべき時日未明なり、仄に聞く、元山津へ

当支隊漸次渡韓の上は、各隊各部とも舎營し能はさ

送軍せし船舶の帰來を待つもの、如しと、又或る人の曰

るは論を俟たず、多くは露營と決心せざる可らず、

く明後日位ならんと

就ては専心飲食を慎み、各為し得る限りの摂養をし

廣島兵營には支那兵の捕虜三人ありと、是れは多分兵卒

て、此艱難を凌ぎ、負担の任務を全ふせん事を企望

に支那兵を見せしめん為ならんと、又或る曰く、是れ兵

す、

營にて捕虜を留致するなりと、牙山の戦に(成歎駅の役)

豫め右訓示す

負傷せし歩兵少佐橋本昌世氏を預備病院に訪う、其説話

但し役夫等に至りてはとくに其主宰官より嚴重

によれば支那兵とて別に恐るゝ程の事はあらず、但し水

に示すべし

質悪ければ飲水は心得ねばならぬ云々

午後二時第一大隊本部及二個中隊(四百九十三名)大小

愈以て御清安被遊候事と奉存候、当地川崎君始め武

行李半部(馬匹二十九頭)九月一日出帆の薩摩丸に乗船、

藤に至るまで無事、御安心可被下候、辰治郎も同断

元山に向ふべきの命令を受領せり

と存候、廣島新聞等写真を明日郵便にて送り可申候、

大隊は搭載人馬の員数を規定し、人馬搭船表を聯隊本部

今日より明日の景況は次便に譲り可申候、御一同様

に出し、大隊長は宇品港に出張し、乗船の事を運輸通信

御機嫌克願升

長官と協議し、搭船準備全く整頓したり、而して午後六

八月三十一日午前十二時記し了る

金蔵

父上様

明一日薩摩丸乗船は差止めらる

一等患者 兵卒 一名  
三等患者 輸卒 二名  
計 三名

家信 九月一日夕於廣島発 (甲)

前日の汽車にて一般疲労の上に、日直相当なるを以て市内の景況も更に知らず、此家の主人可児久成は廣島縣属にて当時出張中なりと雖、兼て準備もありしと見へ、取扱等中々丁寧にして、万事一の不足なし、該家の老嫗は旧士族の余流をもって戦争の門出などと、実に古律儀の方法を以て待遇されしは一の美譚として記すべき事なりし

本日(三十一日)は、夕刻五時より部下中隊の下士一同を喚び、中隊長以下日本内地を去るの前祝をなしたり、而して兵卒へは牛九貫目を与へたり、其意は蓋し出陣の勇気を鼓舞する為めにありき、当宴は真に中隊一家の内祝にして、各人開襟して愉快に撤せしは午後九時頃なりし、今茲に特に其人名を記し以て他日の記念に資す

中尉川崎四郎、中尉市川堅太郎、見習士官野元彦二、曹長坂根敏雄、一等軍曹若原龍太、一等藤井為三郎、一等鶴岡常磐、一等山田藤吉、二等大脇銚磨、二等

味岡 一、二等谷 籠次郎、二等岩崎倉蔵、二等佐野菊松、二等稻木米次郎、二等江崎藤太郎、二等新美新次郎、二等柴田銀太郎(抹消)、二等河井浪平、二等岩本捨次郎、花谷繪一郎、従卒武藤安次郎、後藤松次郎、伊藤録次郎、堀内龜二郎、当番森房太郎、深谷徳次郎、

田坂養吉(可児氏宅家人)

及 山岡金蔵の二十有七人とす

嗚呼、此二十有七人の者再び一堂に會する事難し、今後一たび弾丸の下に過ぎなば、其能く相會するもの果して幾人ぞや、即ち一夕の宴一次の飲、其必ず再びすべからざるを知り、郵に附して家郷に送る云

此夕余の最も感動せしは、佐野軍曹の一言にてありし、曰く、酒池肉林余が快と榮とは極れり、唯思ふに我部下の一小陋屋に群居し、朝夕一の茶一の湯なく敢て美食を望まざるも、一切の沢庵のみにて他に魚菜なき慳吝家にある事を思へば、喉内に嚙下する能はず、小隊長の感如何と、余は之か為めに慰諭甚だ力めたりしと同時に自ら大感已まず、嗚呼良將は卒と食を撰ばず、卒の為めに尽す、故に卒も亦將に事に死を以て報ずと、今に於て殊に兵卒の愛惜すべくして、下等幹部の心を用ゆる、此くの

如くに至るを以て規範とすべき事を知るなり、平生の等閑に有事の日に方り幾多の不智を自覚する事後人の為めに蛇足を記し置く所なり

(以上朱書き)

九月一日 曇

廣島滞在

午後十一時三十五分、歩兵一中隊大小行李駄馬十一頭、明二日午前十時より乗船元山に向ふべきの命を受く、依て直に搭船表を製し、大小行李に区分し、第一中隊長及大小行李長に乗船を命ず

(朱書) 一等患者 一名

二等患者 二名

駄馬の内、病馬三頭 徴発馬を以て補充す

家信 九月一日夕 於廣島 (乙)

本日午前第四中隊長橋本秀則を宿舎寺田祐之(広島県警部長)宅に訪ひ、雑談刻を移す、続て庭園を徘徊し、庭池の魚イナを打漁す、此宅は一面市街に接し、一面壕に臨み、瓦屋参差の状、水影濃淡の景、両つながら之を占む、此二階に坐し、茶を掬し、碁を囲み、世塵の俗を脱して、磊落の氣宇を学ぶ、半日の遊興少しも長倦を訴へざりし

午後一時、第五師団副官山田隆一を師団司令部に訪ふ、同人は余が士官学校同期同隊の学友なり、学窓を脱して以来別離して再會を得ざるもの八年、何ぞ知ん、今回事件に付て同人と相懇話せんとは、同人余が刺を持ち欣然握手応接所(楼上)に導き、又一話なし、既に口を開きて又朝鮮事件のみ、曰く、不日第三回の補充兵を送らんとすと、曰く平壤は第一軍によりて攻撃さるゝならんと、曰く山縣 軍司令官来廣ありと、曰く何、曰く何、凡て一談一節、雑吟吐出、同人は繁忙を忘れ、余は時間を忘る、午後二時過に辞して去る

師団司令部は蓋し廣島城の本丸なり、巍然たる天主は宏壮なる洋館と相列す、洋館即ち司令部なり、而して兵營は内壕の東よりして北、北よりして西に一道路を巨て、並び屯す

午後二時三十分、歩兵第二十一聯隊を訪ひ、午後三時歩兵第十一聯隊を訪ふ、補充大隊副官立永勝三郎は余が同期生なり、依て久濶を叙し直に成歓役に就ての事を問ふに、幸に同聯隊には混成旅団より送り来りし牙山及成歓の分捕品あり、一覽すべしと乃ち伴れて将校集会所に入る、一々説明を聴き、氷水二杯を饗せられて帰る、其分捕品凡そ次の如し

クジャクの羽の玉

清國の勲一等の由

(画は省略)

赤と白 陣羽織

是は葉提督の軍旗の由、

くつ 麻を縦横に織る

既に連発銃にて獨乙のモーゼルと云ふものなり、

火薬はけむりの少き者を用之、当時の戦法は専

らつき込む事の由、

此内に□□の如き小さき薬り瓶を入れ、其中に

千瘡万癒散とか云へる文字あるもの数個あり、

此外にアヘン煙草及シンチュウキセルあり、其

形ち

豊橋諸隊は佐藤支隊として、去る二十八日午前十一時出

航元山津に向ひたり、又当地の補充隊より兵卒三百人本

日乗船出発の筈なりと聞知す

当地病院には負傷者三十八名、其他脚氣患者・梅毒患者・

赤痢患者等百二三十人なりと云

電報によれば、本日は野津第五師団長京城を出発し平壤

攻撃の途に上れりと、

来る五日第一軍司令官山縣大将以下将校六十余名来廣の

筈なりと、序に物価を記す、先づ酒の外は平生の三倍に

当ると云

夏蜜柑 一個十三錢、卵 一個三錢五厘、酒 一升

二十一錢、カテステラ 一本拾錢、氷 三斤二十

五錢、

私共無事御安心被下度候

九月一日夕 七時 認

父上様

金蔵

九月二日

家信

昨日御報申上候以来は唯当地に滞在、空しく休息致耳、

当地より出発せし歩兵第十一聯隊及第二十一聯隊の下士

卒負傷或は病氣の為欠員に付、其補充員本日乗船出発し、

同時に冬物等も送り出せしやに聞き候、之が為めにや、

我師団は一人も出発不仕候、又歩兵第十九聯隊は当地へ

参り申候

昨日申述候分捕品に付、大隊長と第二第三中隊長へ相話

し候処、下士以下等の参考になるべき儀なりとて、小子

に誘導すべきを命ぜられ、乃ち案内者として再び歩兵第

十一聯隊へ至り候、一覽の後は誰しも旗の粗末に大なる  
と、赤色の陣羽織には噴飯せざるはなし、捕虜支那人中  
二人は水兵にて他の一人は李鴻章部下の喇叭手の由に御  
座候、此喇叭手は少々文字を書き得るも、他は何にも知  
らざる由、歩兵第二十一聯隊にて丁重の待遇を受け居候、  
乃ち平生は靴工場にて起居せしめ、下士一名上等兵一名  
兵卒一名にて番をなし、又日々時間を定めて営内の散歩  
せしむる由に候

今朝四時に報あり、第一中隊は人夫四百人を引率して乗  
船せしむと、何等の流傳なりしや全く誤りなりし

今朝六時より一時半間、廣島練兵場にて戦闘訓練を演習  
致候、全く衛生の顧慮より此くの如し廣島市の写真十五  
枚御送り申候、当市蚊は甚だ少なく候得共、暑気甚敷、  
物価は愈々昂騰に候、新聞は大坂朝日が迅速精確の報道  
をなすとの評に候、当地新聞は五日まで御送り申上候、  
代價は仕拂置候

高木熊次郎は酒保用人として従軍仕候に付、此者へ御托  
しあれば品物は届き申候、冬物は毛糸又はスコッチ靴下  
手袋等が入用の趣きに候、私共は用意致居候、  
先は右申上度余は後便に譲り候也、謹言

九月二日午前九時

金蔵

父上様

家信 九月二日午後八時発 廣島市水主町可見  
久成方

謹啓 愈明日午前六時半宇品出帆高砂丸にて元山津へ向  
け出發致候、多分聯大隊本部も同乗ならんと存候、住の  
江丸へ那須中尉分乗の由に候、  
海路四百五十哩との事にて明日より四日目には到着する  
筈なり、委細は上陸の後景況可申上候

恐々謹言

九月二日 午後八時

金蔵

父上様

尚々皆々様御安全を禱り候、不日に名誉を以て凱旋可仕  
候賦の字は守り可申候

九月三日 乃至 日

家信

謹啓 去る三日廣島宇品出發、本日元山津日本居留地に  
無事到着仕候、景況左に申上候、  
(以上朱筆)

九月三日

午前六時三十分廣島市水主町可児久成方出発、同八時半  
宇品港にて高砂丸に乗船をはじめたり

午後一時出帆、天気晴朗にして波静か、名にしおふ厳島  
附近の名勝とて、見るもの悉く眼を貽はしめざるはなし、  
乗込人は旅団長大迫少将を始め、歩兵第五旅団の幕僚と  
岡本少佐に第一大隊の将校監督補大野賢一郎、一等軍吏  
杉原全徳等、将校三十四名、下士以下約八百名なり、我  
等より少し前に歩兵中尉那須仙太郎は一小隊(六十六名)  
を率ひて、人夫四百名を率ひ住之江丸に乗込、騎兵少尉  
鍋島己巳郎以下三十七名は同乗せり

高砂丸は千二百六十六噸にして御用船中大なるものなり、  
此船は布哇・南洋等へも航海する由、船長は楡井二郎と  
云ひ会津藩士にして白虎隊の一人たりと申す、年令は三  
十八九才位なり、中々快活の人なりき、監督将校は海軍  
大尉にして尚大機関士一人乗込みあり

此度の戦争の為、西洋人の船長は悉く小なる船に転乗せ  
しめしが、只兵庫丸には和蘭人一名船長をなせり、此人  
は年齢七十才にして此人計りは二十年も我國の生活をな  
し日本人と云はれたいと云ひ居れり、勿論日本語にも熟  
通し居れるが故を以て、特に御用船の船長を許可されあ

りと云

船は走れり、鷹の巢砲台附近の我海軍の警戒網を出て、  
四国・中国間の海波を横行し、島嶼の応接違あらざる間  
に日は西に□けり

午後八時全く暗黒となれり、食堂に入れば清語通訳呉泰  
寿は清語の教習を始めたり、

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十、 イー ア  
ル サン スウ ウウー リュー チー パー チュー  
シー

此呉は元と明人なり、清代に至り日本長寄に來りて帰化  
し、今に至り十七代を□し専ら北京語に通習すと

壇の浦、馬関、彦島の辺は夢の間に打過ぎしが、午後十  
時より翌四日午前二時には驟雨に出会し、一時は波に翻  
弄せられしも、無事に経過せり、

九月四日

玄海の大怒濤も比較的安全に通航し、午前七時起床せん  
とするも船暈の為起つ能はず、同室の中尉島田愛信及山  
縣駒喜等は何れも酒に飽かぬ人なれば、ブランを傾けし  
も却て尚眩暈を増す思あり、午食もそこそここにて舎内に  
蟄居せり、午後一時頃に至りて甲板上声あり、朝鮮が見  
へますと誰しも飛立つ

計りに起上げれば、禿山模糊として舟の高低に依じて上下するを見るのみ

夕七時、船長以下と会食す、悉く席に列せしも、奥宮大尉の如きは直ちに頭を擡げて去れり、船長曰く四五日海に馴るれば又船暈を生ぜずと、某曰く、如何に西洋料理の御馳走なればとて、頭をかかえつつ見に来るにも及ぶまいと、一同哄笑す

九月五日

朝起四方を望むに、蔚山迫り左舷にあり、船員曰く、今や永興湾内にありと、海波一碧室内に坐するが如し、清正の籠城を語り出すは人情何れも同一なり、

午前十時元山津に入港す

午前十一時余は宿営準備を命ぜられ、旅団副官藤林敏正と共に短艇に乘し先つ上陸す、四百八十余哩の海路は茲に終了せり、

元山津居留地は使用すべき戸数約二百五十計りなりしが、三千四百人と馬匹千頭を入れる、筈なるを以て、畳一枚に五人乃至六人を容れざる可云々、其の狭縮と云んより寧ろ露営と云ふを勝れりとす、我等は幸にして五人にして六畳を占領せり、

朝鮮は、前日歩兵第十八聯隊の上陸するや、皆逃れ去り

しが、居留民は先つ梨桃等を与へなどして之を招致し、今は人夫として却て多数入り込むに至けりと云ふ

朝鮮人は白衣を着したる神主様の服装をなし、帽を被ぶるものは妻帯し、帽なきものは労働者とす、長さ二三尺ある煙管を口に啣へ、背に物を擔ふか、若は頭上に載せて従事す、外貌端正にして直立直行する様子は如何にも君子然たり、

朝鮮人の最近地にあるものは元山（アンサン）とす、極めて不潔なる家屋にして、居留地を去る約十町にあり、しかも其門標には左の如き文句を記せり

春峭催梅花 立春大吉 儲金一日得千鎰

耳に立つは朝鮮人の魚売なり サラーサラーと呼びて、さはらを持ち来る、三尺位の長さあるものにして價三拾錢、廉と云ふへし

当地赤牛多し、聞く所にては安辺附近の山中に放牧す、大抵日出頃に山より牛を引き来ると

朝鮮人は入浴せず、臭氣可厭

予は中村商店に宿泊す

九月六日

元山津滞在

韓人より物品を購ふには凡て韓錢を用ゆ（穴跡銅錢なり）



其一文は我三厘強に相当す、内地に至れば銀貨殆ど通用せずと云

韓語の一二を記せる、次の如し

ヤーヤー(オイコラと云ふ意)、ヨナラ(来れ)、カチョー(持ちてこい)、カブシ(幾何価ぞ)モツタオ(それは善けない)、スール(酒)、カエツソ(行かん)、トン(錢)、モツタオ、カエツソ(いけない)

朝鮮は土人「チョーソン」と申し候、主人は身長往々六尺に及び、骨格太くたくましく品位あり、顔色土色を帯び、如何にも雄々しきも、其智の到らざる狡猾なるは日本人より遙かに下位にあるが如し

元山には戸数約二千、豚小屋同様の倭屋にして穴居の變形と評する外なし、屋根は瓦を以てするものを上として、其多くは茅藁の類を用ゆ、周壁は凡て楊樹を骨子として土壁とす

屋内には特に裝飾品なし、釜を用ひずして鍋を用ゆ、此鍋を用ひて煮炊するも、別に取外して洗ふ様の事はなさ、るか如し

道路は天然に委して修築を加へず、牛馬人糞散乱し、之に食品の腐敗を加ふるを以て、一往復に已に嘔吐を催す朝鮮人には便所の設けなく、大道に放尿す

馬は極めて小なり、高さ三尺に満ざるものあり、而して能く人を乗せて走る驢馬あり、土人之人に乗る、脚地を隔る事五寸、尚遠く七八里以上を往復すと長煙管を啣えて往来する所、実に一幅のポンチ画たる観あり、

朝鮮巡検は帽上に赤又は青色若は黒色の「フサ」を附しあり、毛を以て作れり、土人之人に出会するとき必ず敬礼す、敬礼は所謂蹲踞するものなり、此巡検も亦長煙管を持す

巡検の帽と土人の帽とは相等しく共に黒色にして馬毛或は竹を以て製す、曰く国王より此冠を賜ふ故に、之を損破するときは罰に処せらると、其竹を以てするの意に曰く、竹は清浄にして直立す、故に頭脳も亦常に此の如くなるべしと云ふにありと(カンパンと云ふ土人の言)

土人は必ず綿入の足袋を用ゆ、大暑と雖、跣足をなさず、鞋を用ず、鞋は足先を出すべき如く「わらじ」となす、裏にワラ、麻・又は布を用ゆ

土人は魚菜類を行商するに木舟を用ゆ  
明太魚は当地の産物なり、六七十里北方の産にして「めぐたい」と云ふ魚なりと、寒中氷にて乾固したるものにて鯉節の類なるが如し、恰も東京のます、伊勢の鯛、北海道の鮭の如く、吉凶時に用ゆ、長さ一尺二三寸にして

味なく綿を嘯むが如し、頗る高價品なりと云

土人は酒を飲むものは日本酒を喜び、又テンプラを好めり

土人の中、日本語を解するものは、紙幣銀貨を通用するも、其他は凡て韓錢による、其形状は大小あるも凡て一の價値なり、(表裏の貨幣の図省略)

韓錢三文を以て一錢に換算す、但し平素は十五割と唱へ、日本の一厘は韓錢の一文に当りしも、日本軍の来りし為騰貴せしなり、

韓語次の如し

ヤー、カマイカラ(待て)、オテカ、カツソー(何処へ行くか)

氣候は昨夜六十度なり、朝夕袷を用ひざる可らず、日中は八十三四度に至る故に、フランネル・シャツを用ゆるを上とす

居留地は飲料水に乏しく只二ヶ所に清水あるのみ、其他赤濁にして鉄気を含み、臭気ありて飲む能はず、米は朝鮮米の陸稲にして赤色を帯ひ味なし、牛鶏肉は比較的沢山なり、梨子・白桃あり、白桃は其大さ梅実の如し、味稍可なり

聞く所によれば、一昨日大雷雨ありて、前進せる歩兵第

十八聯隊の兵卒二名は山崩に出会し死亡せり、聞川(又は文川?)地方なりしと云、到る所溪水氾濫し、往々善泳者をして徒渉場を偵察せしめつつ進みありと云、死亡せし兵卒の死体は発見せられ、午後一時本願寺に埋葬す清兵の間諜出沒す、本日二名を捕獲せり、此者深く笠を被むりあり、

午後元山に安昌■なるものを訪ひ、筆談して風俗等を問ふ、彼曰く、日本軍至れば韓人皆逃れんと、依て規律厳正、一毫無犯と訓諭せり

九月七日

記事なし

九月八日

朝鮮巡察の事に付一奇談あり、此巡察は人の悪を検挙するは勿論、例へば賭博場へ踏込むとすれば罪人を逮捕する外、現場の金錢をも自ら奪取收拾するなり、故に巡察には金満家多しと本日加給品あり、酒一合四勺 缶詰牛肉二十勺 干鰯一と握み

九月九日

午前五時第一中隊は陽徳兵站部全力護衛の為出發す

九月十日

歩兵第十八師隊第一大隊は本日成川に向へり、兵站部は

陽徳の東一里なる柯木府にありと

旅団副官若見中尉の話に曰く、第五師団は第三師団の来着を待て平壤を攻略せんとするものの如し、目下第三師団の主力は仁川へ輸送中なり、従て我後発隊は来らず、旅団長は頻りに待たれつつあり

九月十二日 元山津居留地発信

九月十一日午前六時元山北方松亭に遊ぶ、戸数約百、陋矮元山に同じ、土質砂礫多く土民農を業とす、米、大豆、黍、粟等若干を産す

徳原府は松亭の西南約一里にありて府使之に居る、元山よりは家屋稍優れるも到底陋矮は言語に絶ゆ、

同日午後「カンチャバン」なるものに会す、同人は能く日本語を解し、元山に住居す、年齢二十七才なり、同人の語る所、次の如し

一、朝鮮は一度大改革を経ざれば開化に進む能はず、何時までも退歩して清國人の壓制を甘受するは奮慨に堪へず、今度の戦争にて日本人の勝利により吾等を啓発せん事を望む

二、大院君は日本党にあらず、又清国党にもあらず、恰も小児の如し手を携へらるゝ方向に傾くなり、

三、予は日本語を解す、然れども元山に帰りては、又

一の日本語を發せず、何となれば生意気なりとて擯斥せられて齒せられざるを以てなり

四、当地の警察署長は日本党なり、故に清国勝てば此人は殺さるべし、予も亦日本党なり、故に日本若し敗るゝあらば、冠を去り遠く田舎へ遁去するの覚悟を有せり

五、朝鮮人の冠は極めて貴重なるものにして、人夫雇役夫の如きは之を冠するを得ず、冠なきものは労働夫にして従て重き罰もなし

冠は朝鮮にては唯一ヶ所の島にて作る、(竹にて製すー抹消) 此島は婦人のみにて男子は皆本土に送り還さる、云はば留守中に製作するなり、一個の價二三円より二三十円に至る

六、婚礼は大要日本風と相似たり、先づ男子は女子の宅に至り三日逗留し、女の親類と心易くなり、祝言を濟まし、後女子は男子の家に至り村内に披露をなす

男子は十五才にて、女子は二十才位のものを妻とす、男子の尚修業盛りにて結婚をなさしむるを以て、其子女皆賢なる能はず

無妻男子、無夫の女子は結髪を許さず、辮髪をなさ

しむ

七、国内の交通は飛脚便による、郵便・電信の便を有せず

八、年号は支那に准じて光緒十七年月日と云ひ、又開国五百四年月日と云ふ

九、朝鮮に書籍あり、経書の外は概ね荒唐なり、潮の干満日の吉凶を知り得べし

十、加藤清正の事跡を知らず、只云ふ、三百年前日本人朝鮮人と争闘し元山附近は日本人通行せし、然れども、清国人の為に負けて逃去せしと傳ふ

十一、虎多し、近時は犬を多く使用して之を防ぎ一方には戸閉りを厳にせし為、復来る事なし、虎皮は凡て浦塩斯徳に送り、又同港より輸入す、一枚五六円より四十円に至る

十二、朝鮮軍隊は京城・平壤の外二ヶ所にあり、平壤には二千人を有す、火繩銃を携ふ

兵は一ヶ月米一俵木綿一反と錢五百文を以て雇役せらる、是は国王よりの命令なり、然れども實際は官吏の為に誅求せられて、米二三斗と錢二三百文を得るに過ぎず、日本兵強、朝鮮兵逃、大國兵亦朝鮮兵相同

陽徳より帰來せし朝鮮語通弁より左の事を聞知せり

一、陽徳近傍の土人は皆日本兵を恐れて逃去せり、依て其家屋を清掃して宿舎に充てたり、従て何等新報なし、

二、清兵二三人居りしが我を見て脱兎す

午後七時舎弟辰次郎來津せり、

本日の風説に曰く

一、軍司令部及桂第三師団長は仁川に向ひ渡航せりと  
二、平壤の清兵は堅固の防壁工事を続行しつゝあり

九月十二日午前六時騎兵少尉鍋島己巳五郎の率ゆる一小隊は成川に向ひ出發せり、

「カンチャバン」來る、閑話左の如し

一、九月十三日乃ち朝鮮の八月十五日は朝鮮の盆にして、大節期なり、盆踊をなす、此時には男女とも飲酒し、牛肉を喰ひ、山車等を出し、三味線を弾き、大愉快に遊ぶを例とす

二、朝鮮にては平壤が一等の繁華地にて、元山より五十里あり、官員は中軍(軍事の隊長)、府使、監司なり、毎年国王の天長節には宴会を開き、平壤の官妓は揃ひの衣裳にて朝鮮踊をなす  
平壤の官妓は三百人あり、尚地方より音楽修習の為

- 二百人以上もあり、日々弦歌を絶たず、貴公等清兵を逐ひ拂はば、一度此踊を見るべし
- 三、土人死亡するときは、山へ持ち行き棺を置き、其上に土を積りて饅頭形をなす、下等にありては、墓碑も何にもなし、皆心覚にて誰の墓なる事を記するなり、父は三年、母は二年の喪に服す、若し父死して、母後ちに死するときは、母の為三年の喪二服す喪中は冠りを許さず、布の被りを用ゆ
- 四、白衣は上下夏冬を通じての服装なり、黒衣、赤衣、青衣、藍衣を用ゆるは官吏に限る
- 五、朝鮮人は韓錢と銀貨の相場変化するを憚ひて韓錢を好む、紙幣も亦同じ
- 六、本日牛八頭を売れり、一頭二十円の原価にして三十三円に売れり、日本人は肉を喰ひて皮を捨つ、余は日本兵に尾し、此皮を若干金にて買はん事を希望す
- 七、土人は一年三百円の生計費を要す、何となれば、実際の生計費の外、万一刑辟に触るゝ際、賄賂を要すればなり、金力あれば桎梏の刑をも免ぜらるればなり
- 八、予は日本語を知るの故を以て、日本勝つにあらざ

れば殺さるゝならん、予は嘗て一週間長寄に居れり、朝鮮の起居は逆ても日本に及ばず

凡聞、左の如く

- 一、余等は多分明後十四日早朝成川に至るならん、同所にて旅団を合し、平壤攻撃に移る筈、成川までは六日行程あり(三十八里)是より平壤までは十二里なり、第十八聯隊は本日成川にあるならん
- 二、平壤の大戦は第三第五師団の合撃に出づるならん、左すれば本月末以後にあらんかと想像せらる(九月十二日午前十時まで□□)
- 目下 菊花 爛漫し 桃梨頗る甘味を帶ぶ
- 九月十四日 午前四時三十分 発信(元山津に於て)
- 九月十二日夕及十三日には酒一人に付四合、巻煙草百本つゝ加給品あり
- 十三日午前十時三十分次の聯隊命令あり
- 聯隊は明十四日午前五時三十分出發、成川に至らんとす
- 本日杉箸飯を作る 頗る珍
- 夕刻元山津領事館に将校の会食あり、午後七時大迫少將の挨拶次の如し
- 本日諸君と茲に相見るは欣喜とする所なり、初め歩

兵第六連隊長は諸君と茲に会食を希図せられしが、余も亦同催しをなしたき意見なりしを以て合併して設くる事とせり

諸君の前にて先つ謝すべきは領事上野君の労と当地総代諸君の尽力にて、部下兵卒をして満足に此地に滞在せしむる事を得たる事はなり、次に兵站部諸君の勞にて、全く糧食上の便宜を得たる、是れ余が帝國軍隊の為感謝して已まざる所なり

本日は未だ敵と相接せず、明日か明後日には敵と出會する程度に第十八聯隊は進みあれば、諸君は充分に飲食せられて安心なるべし、第六聯隊の諸君は明日より出發せらるる事なれば、此の如き好會は凱旋の上更に設けたき考なり、諸君自愛せよ、

仄に聞く、本日は 天皇陛下の大帷幄を廣島に移さるゝ日なりと、請ふ陛下の万歳を奉祝せん

陛下万歳 万歳 万歳 万歳

是より酒宴に移りたり、出戦前夜の下物は次の如し

明太魚 牛肉 松茸 金柑漬 牛蒡 人参 梨

次て午後九時 旅団長 連隊長の万歳を唱へて解散す

此夕下士卒には酒一合牛鐘詰を加給す

元山津滞在以降未だ一滴の雨に接せず、行軍準備整備し

得て意気大に振へり

九月二十四日午後四時 平壤東方半里院峴に於て 発信

九月十四日午前五時三十分元山津出發

同時情報あり、昨夕旅団に達せし報告に、敵の騎兵千五百成川を襲撃す、成川には兵站司令部ある筈、歩兵第十八聯隊は同地にあらず

馬息嶺は元山より平壤に至る道路中第一の絶険にして、延長四里半、概ね急峻絶崖にして、且つ羊腸路なり、我工兵にて修繕し、僅に牛馬を通ずるまでになせしも、固より岩石なるを以て、牛馬倒るゝもの頗る多し

午後四時馬息洞に露營す、此夕手鍋にて罐詰肉を煮る、陣中碗の必用を感じり、此夜殊に寒氣を覚る、夜来の風雨天幕も其効なきにまで劇甚なり、夕食は十二時に分配し、副食物は梅干三個あるのみ、聞く、道路困難にして副食物の一部は崖中に陥り、亦倒牛の爲め後進を妨げられて、豫定の如く大行李は続進する能はざるによれりと工兵特務曹長黒田伊平に出会す、同人曰く、歩兵第十八聯隊は此山を迂回せしが、其道路は今や溪流となりて通行する事能はず

九月十五日午前六時卅分出發す

阿虎飛岑の険あり、上るには左までにあらざるも、陽徳



に達する為めに絶崖を下らざる可らず、其降路一里半、岩石散乱して河礫中を通過するよりも一層困難なり、為に足痛者を生ぜり、聞く、此徑路を開く為には無煙火薬を用ひしが、朝鮮人夫は此音響に驚愕し逃亡せしを以て、工事上頗る困難を訴へたりしと、果し然るならん、如何にも修築不充分なりし

午前十時馬顛洞に達す(マルクリーと称す)此時兵站部員より成川敵襲の虚報なりし事を確め得たり

午後四時上自介洞に到着す、此夕南瓜一顆を得たるを以て、味噌桶に入れて之を煮炊す、已に終らんとして桶破裂す、依て大笑、相謂て曰く、日本人は是非とも醬油類の携行を必要とす

此地よりして瓢を二分し椀柄杓に代用す

此夜山雨一過し人馬大に疲労す、行程七里強なりと云ふ九月十六日午前六時半出発、午後一時三十分陽徳(ヤンドと称す)府に達せり

道路は平坦と称せしも小坂多く、道と称すべきものは溪澗の小徑にして、岩石の間を迂回し一棧一橋の存在するものなり、一般に疲労甚し

陽徳府は、家屋一般に藁屋又は板屋にして、上に板石を以て重蓋となす、瓦を用ひざるは其凍裂を防ぐ為めなり

と、大倫坊倉舎と称する米廩あり、瓦葺なれども又丸瓦を上蓋ふ

此行軍途上に山葡萄沢山なり、往々之を食して腸胃を損せしものあり、注意すべき事なり

陽徳府は僅に市街状をなす、土人は日本兵を恐れて皆山中に遁逃せし、府使之を招諭しつつあり、府使元と元山津の警察署長にして日本党に属す、土人の居らざる為、少しも地形を聞知する能はず、其筆談し能ふものに會し、之を問へは只無しと答ふるのみ、蓋し槍掠に遭ふを恐る、に出づるならんか岡寄亀彦(四日市の人)に出会す、同氏は負傷したるも治癒の上取る一日より当地に來り居り衛生隊附たり、同氏よりうで豆及ブランデー酒一瓶を受く、露營の夢是に於て静かなり

九月十七日午前六時出発す、途中温泉に至る、硫黄泉ありて入浴す、此辺一帶に温泉潰出し田畝の小溝にして野菜能く五分間に煮炊せらる、此流下に於て入浴を試み、元山津以来の垢を脱せり、然れども入浴後は疲労一層激甚となりしを以て後來行軍の際には一考を要すへき所なり

午前十一時原倉に達し露營す  
酒保行商人あり、就て武蘭酒二本パンにラムネを求む、價は内地の二倍強なり、不正商人の暴利は軍隊の蠱毒な



り

気温は去る十六日正午八十四度にして天明は四十七度なり、夜間露営は漸次困難となれり、

本夜大迫閣下より中隊將校へ鷄二羽づゝを与へられたり、蓋し陣中の珍肴之に過ぎたるものなし、

土人の言に曰く、牙山の陥るや清兵二名陽徳より来り、此地に於て日本の薬行商二名を捕へ之を平壤城門に曝らしたりと

一昨十五日出騎兵斥候の報告到着せり、平壤方向に砲声を聞くと、依て旅团长は本夕成川に向ひ急行せり

本夕の副食物は味噌汁にして昼食は梅干三個

九月十八日午前六時三十分出發、午後一時破邑に達す行程五里

道路は概して善良なるも固より道路と称すべきの價値あるものにあらず、川あれば架橋なく、二三の独木橋を架するものは深潭なり、磊石何々たる所亡国の状況を現出せり

破邑附近の山脈は、最早馬息嶺・阿虎峯の如く險ならずと雖、尚崔嵬の余姿を存せり、破邑の東凡そ

二十町程に温泉ありと聞きしも、疲労の極之に到らんとするものなく、余も亦水浴を行へり

序に朝鮮虎多しと云へども、余は未だ一度も見し事

なし、又竹藪は一ヶ所も見ざるのみならず、竹すらも之れなし、田は防田、約田と称するものもあるも、

皆日本の畑にして其收穫するものは陸稻、高粱、粟、豆等なり、見習士官野元彦二曰く、鳥息峯を越ゆる

際、北方十三四町を隔てたる峻山の頂の辺りに、牛の如きものを見て、双眼鏡を出し之を見たり、馬牛の居るべき位地にあらざれば、其何たるを知る能はずと、同隊七八人のもの均しく之を称す

元山津より先發せし第一中隊特務曹長吉木一平に會す、同人曰く

人夫の話に、第十八聯隊は成川の西方に於て清兵と戦ひ、大砲・軍旗等を奪ひ、大勝利なりしと、山縣中尉は成川に向ひ前進せり

原倉破邑等の人氣極めて悪し、人夫に石を擲付たる事あり、全く他国兵来りて槍掠を行ふとの余憤に出づ、是れは清兵通過の跡なればなり

九月十九日午前六時半出發、午後二時加倉に達す此行軍途中に於て、平壤は我軍之を陥落せりとの報あり、

一同は喜び、且つ我が目標を失ひしに残念と呼ぶもあり、大日本万歳を唱へたり

昨十八日、途中尾洞と称する山水明媚の地に昼食をなし、切昆布の塩煮に握飯を食せしが、本夕は平坦地に於て空しく握飯に梅干を喫し、平壤の噂さを以て時刻を送りたり

午後二時に至り次の通報あり

去る十三日、歩兵第十八聯隊は岩赤川店に至りしが、糧食は尽き、人馬疲労し、敵は前方に來り攻撃せざる可らざる形況となり、遂に順安縣にある敵を攻撃し其兵站糧食を奪ひたり、此時第六中隊先頭

十四日徘徊亭に進むとき、敵の先隅里にあるもの約一中隊を破りて其堡壘を奪取せり

十五日坎北院・坎北山を占領し砲兵陣地となし、工兵を以て掩堡を築く、敵は北峴及北東橋店にありて我に對せり、此日立見少將の隊と連絡する事を得たり

午後攻撃を續行し、直に平壤の城下に至りしも、石垣高くして上る能はず、諸門皆閉ぢて入る能はず、互に射撃を交換せり、此夕敵は白旗を挙げて降参せんとす、我軍依て射撃を止め、城外に露營せしに、敵は逃出を企て、四回程我に逼り突き込みしが毎戦皆勝つ

十六日午前未だ明けず、敵千人計り門を開き北に逃れんとす、我騎兵下士某・兵卒五名は急に順安にある護衛中隊に告ぐ、此騎兵は千人以上の敵中を切り抜け、此事を告げし為、同中隊は之を待設け、大に之を猛射し、敵の死者道路上にあるものにて已に四五十名もあり、我隊に死者一、傷者四

同時旅団長の許には左の通報あり

敵は永柔縣の方に敗走せり、我騎兵一中隊・歩兵一大隊は追撃中なり

九月二十日午前六時出発、午後三時成川府に達す、行程七里

元山出發以降始めて韓人の家屋内に入る、六秋館と称し刑事調所なりと云

成川府は成都と稱し、離宮とも云ふべき地なり、戸数約二千を算する殷華の地なるも、人民は皆山中に遁れて悉く空虚なり、東明館は巨刹にして巨堂あり、堂内裝飾なきも、四辺の彫刻物は丹青を用ひ旧時の大觀を想像せしむ、堂の西側は拂流江にして所謂朝鮮の赤壁なり、文人詩客の來遊するもの右岸の崖岩に姓字を刻し以て記念となせり、李範晋の文字は尤も大にして、一字大さ約二間四方以上ならんと思はる、風色の媚は瓦洞に及ぼざる感

あるも、逆に角成都の勝地にして東明館の大観とする所なり、成川府には兵器庫あり(火繩銃七十を蔵すと)伝聞する所次の如し

一、清兵火繩銃を用るもの十五日大雷雨に出会し頗る狼狽せりと

二、成川府に於て過日清の敗將(多分士官)を憲兵下士の手により銃殺す

三、平壤攻撃の際、我第十八聯隊の死七十、傷百四十、第五師団を合して七百人強ならん、第二大隊副官神

田中尉と外大尉一名戦死す

四、旅団副官藤林大尉は平壤に至り、野津第五師団長

より枝隊は一と先づ平壤に来るべきの命を受けたり九月二十一日午前七時出発、午後二時江東縣へ着す、行程凡そ齟五里

成川府南門は可成大にして送客亭訪仙門との額を掲ぐ、尚次の揭示あり、「我軍は平壤を奪ふ清兵大敗す」と一行欣然、早く大同江より舟して清国に闖入せんと放言するものあり

左の事を伝聞す

平壤陥落の為清兵の死せしもの二千以上、捕虜八百人、我軍の某二中隊と將校全く戦死し、僅に下士一

名卒四十名を残すのみ(第五師団)、是は大同江の橋梁を渡りて突入せしものなりと、第三師団は第十八聯隊の外戦闘に參與せず

江都兵站部に歩兵中尉武部敦光氏あり、氏の尽力により南瓜・牛肉・鶏肉及び菜の塩漬等を受く、塩漬は余等の為には珍肴たりし

此夜韓人の家に眠る、臭気と虫の為めに眠り安からず、疲労の為に僅に目を閉づるを得しのみ

中尉山県駒喜歸來せり、曰く、平壤陥落と聞き、前進して平壤に到りしが、死臭処々に甚しく未だ片付けあらず、殊に赤痢流行す、我軍のものは漸く片付けたり、衛門に到りしに、門前支那鞍馬あり、依て之に乗りて歸れり、誰しか今頃驚き居るならん、分捕の上前をなしたり、今や歸路に付かんとせしが、万一追跡を顧慮し下士卒には率き行きたる牛に乗らしか、余は一鞭奔馳し来る、戦後の荒陵と志気の旺盛とは言語に絶つ、余の如き未だ戦争せざるものは平壤に到るに甚だ肩幅狭きを感じり

九月二十二日午前六時三十分出発、同十時寿洞に達し露營す、行程三里

此日直ちに平壤に達し得べしと雖、敵は已に潰乱し、我は四十五六里の山地行軍をなせし曉なるを以て、休養の

必要上、此地に止る事となりしものなり

此地に達するまでには大小の坂路已に数百を踰へ、食事は煮干魚、生味噌、切昆布、梅干の外は殆ど一品も得る能はず、加之、大暑中の行軍として、一般の疲労に只眼計り鋭くなりしこそ是非なけれ、寿洞の東に麦田あり、幅約三百米突にして湯々たる大河にして実に大同江の上流なり、水深三丈以上、櫓を以て舟を行る、此麦田にては騎兵中尉遠藤孝太郎は奇功を奏せり、始め中尉は一小隊を以て陽徳に到りし以来、始終敵を駆逐して、遂に此江に壓迫し、敵の馬匹四十頭を捕獲せし事はなり、余等は此江にて垢流をなして慰勞せり

九月二十三日午前六時四十分出發、平壤に向ふ、途中土人の家屋に放火するものを目撃す、蓋し土人は略奪をなし、其罪状を掩んが為、故意に放火し、日本兵の放火せしもの、如く粧ふものならんと云本日は平壤に赤痢あるの故を以て、平壤東方約二千米突の高地(院峴と云)に於て露營する事となり、且つ後命あるまで此地に止まる事となれり、行程五里  
次の如く伝聞す

平壤の戦に死亡将校八名、下士以下戦死百五十四名、  
雑卒三名、負傷将校二十六名、下士卒三百七十八名、

生死不明下士卒四十名、捕虜五百十三名、朝鮮人十三名、負傷清兵八十二名、朝鮮人二名、清兵の死者は約二千名以上

九月十七日正午十二時より午后五時まで支那海軍十五艦と我軍艦十二隻と黄海に戦闘し、致遠、威遠、揚威、超勇、の四艘を撃沈し、其他の三艘は戦闘力なし、定遠は炎つつ逃げたり、我軍艦松島と西京丸は大負傷せり、死者は七十二、傷者百五十七人  
九月二十四日院峴に露營滞在、

平壤城の周囲は三里にして石垣の高さ三尺より二丈に至り、其内城の壁に至りては、二丈より三丈に至る、外部には九ヶ所に堡壘を設け之を守りしと云

義州街道は死者を以て満され腐臭通行し能はず、分捕品は大砲彈藥軍旗糧食馬匹等山の如し、金塊若干ありしと云

捕虜中連隊長一、大隊長一、其他将校五名あり、大将左宝貴は戦死せり、兵卒の有様は我が人夫より劣等に見受けられ、老若勝手次第の兵卒なり

大島義昌少将は横腹に軽症せられたりと

爾来野戦郵便は月二回と定められたり

医療品は靴毡足メリヤス靴下及砂糖を望み候

十月九日午後三時安洲府発信

九月二十五日平壤府を一覽致せば

平壤落城の景況は二錢切手にては述べ悉す能はず、唯聞知の一二を記せんとす

第五師団長は第五旅団の大迫枝隊を待つ事久し、参謀野津鎮武大尉を元山津に派し、急に平壤の背後に出ん事を命令せり、先発の第十八聯隊第一大隊石田正玲は該参謀と協議して、先づ陽徳まで前進せり、野津第五師団長は京城より中和に進み、敵に接触せしは去る十二日の事なり、撃て之を敗り、平壤攻撃の為、朔寧支隊として立見少将を、大島少将をして大同江方面に、而して佐藤大佐をして陽徳より成川に進み、敵の退路たる順安方面に迫らしめ、自ら平壤の西南方面より進む事とせり、以上は準備の要なり

十五日午前二時半、諸隊は出発し、午前四時大島少将は船橋里にある橋頭堡を攻撃せしが、黍畑高くして堡塁たる事を明知する能はず、百米に近接して始めて五個の堡塁より猛射を受けて、一時退却の止むを得ざるに至れり、五百米まで距りて、茲に踏止り必死抗戦す、午後四時に至り、始めて突貫せり、(敵の退却を見て)、師団本部は戦に與るものは僅に一部たり

朔寧支隊は平壤の北方より牡丹台に向ひしが、仰攻の不利なるにも係らず、猛進し、一堡を陥れば、一塁頭上に聳へ、頗る激戦せり、

佐藤隊は順安より敵を追ひつつ、第一堡・第二堡を奪ひ、城内に入りしも、内城壁高くして上る能はず、只鯨波を作りて、虚声を張りつつありし、

敵は腹背敵を受くるに至りしを以て、困を突く訳にも往かず、恰も大雷雨咫尺弁せざるに至り、之を利用して退却せんとせり、此後降参旗を城櫓に上げ、府使軍使となりて降服の意を立見隊に通ぜり、同隊よりは桂副官之に応接せしと云

平壤の城は、東西半里南北一里悉く石壁を以て之を遶らす、其上端を利用して砲門を設け堡塁を成形す、平壤の東南は大同江にして西と北は畑地なり、故に何れより攻むるも敵の眼界を避くる能はず、地形の雄偉は日本には恐らく此の如くものはなからん、城には四大門・四小門を設け、此外よりは通行出来ず、石壁の高さは一丈五尺に上り、大同江岸に至りては三百尺に至る所あり、上端約三尺基趾約二丈一尺、悉く煉瓦を用ゆ、直立せるを以て攀登するを得ず、又砲弾を以て破墟孔を設くる事困難なり、城内に山あり町あり殷富と称すべし、此地は元と

小西行長の攻防せし所なり

清兵は五万人を以て守りしと號す、然れども其実一万五六千人ならんか

平壤より義州に至る道路は全く屍を以て閉塞せらる、恐らく二千以上あらんか、其大部は第十八聯隊の方面に属せり

金塊三十万両を分捕せりと傳ふ、敵の将官某は我射撃の為に退走中死せりと云、閔泳駿は朝鮮にも居られず、清国にも付かられず、此戦争中何れへか逃去れりと云

敗兵は皆上衣(軍衣なり)を脱し朝鮮人商人風をなして退却せしが、其大部は義州なりと云、又捕虜に人夫の中に混じ大隊長一名あり、

少尉濱田義夫は右腕を砲弾により取られたり、切断せしも生命異常なし

本日から加給品酒式合を受く

九月二十六日晴 滞在す

旧従卒近藤勇吉来けり、又中尉三村幾太郎来訪す、同中尉は玄武門を破り、平壤へ先頭入場せりと詳細の談あり朝鮮の粟餅を食ふ、製法は石の平かなるもの上にて餅を付つなり餡は赤豆のみなりと雖、飢餓者たる下口には上等に食はれたり

軍司令官山縣中将着せらる

九月廿七日晴 院峴滞在

朝鮮焼酎を飲めり、日本酒の如く酔を買ふに足ると雖も臭気著し

桂師団長平壤に着し閔帝廟に宿營せらる、閑院宮殿下第三師団出仕とならせらる

先日海戦に敵艦十五とあるは十一の誤なり、外に水雷艇六あり、合して十七艘なりと、我松島艦は機関を損じ、赤城艦其他一艘を撃破さる、都合三艘の損傷なり

此夜尤も寒く、三十四度に下れり、大同江への航路は安全なり、

勅使として中佐中村覚、海軍少佐齋藤孝至、平壤着の筈なりと

九月二十八日晴、無事にして昼眠極めて安し

九月二十九日晴、鶏一羽を得て美味を覚ゆ、川崎中隊長の手料理

本日、大迫枝隊は全く集合を了れり

九月三十日、露營位地を轉せり

兎玉陸軍次官より山県大将宛左の報あり

或る確なる上海通信によれば、現今の情況次の如し  
九月二十日附通信に、当地新聞は左の如く報せり



清国兵は飢餓の爲甚だ困難に陥れり、天津及北京に於ても兵糧の供給に關し確なる処置を施さず、兵糧は人夫及驢馬にて陸上之を運搬するが故に、途中に於て殆ど之の四分一を消費せり

又九月二十七日の上海通信に

李鴻章は退けられ、遂に凡ての官職を失へり、又呉大倣は李鴻章の後任となるべき風説あり、又北京在留の外国人は、其安全を図る爲、「アメリカ」兵に保護を依頼す

奉天府に集りし支那兵は一万千七百人の由

本日、勅使の御沙汰を傳へられたり

本日より分捕米を分配せ了る、此一俵は五斗五升入にて殆ど七千俵あり、此米と粳と小石を交へありて且精きあらず、依て砂炊り否小石撰りをなさゝる可らず、味なく頗る腹胃を害す

目下赤痢病流行し、第十八聯隊には百二十人あり、我大隊にて四十人あり、滋養物を要すべきに食ふ品なく、三度三度分捕米にらっき(よ脱力)三個又は煮干十二三にては満足する能はず、生味噌三匁位時々渡さるる事あり、如何様にも品物の調弁出来ざるを奈如せん、枝豆等を補食するの結果は此の病あり、痛心々々

十月一日 左の報あり

九月二十九日午後四時東京発、同十一時五分平壤着、兎玉次官より山縣大將宛

天津九月十六日郵便に、呉大倣は遂に朝鮮には出張せざりしも、目下直隸湾海防検閲中、同氏は已に旅順口、山海関、威海衛の三処に赴きたり、それより又北方の諸砲台及兵營を検閲の筈なりと云、旅順港には已に芦台及び南京より四千五百の兵隊を派遣し、応援をなしたり、又清国皇帝は、満州兵を朝鮮国境に駐劄せしめて、朝鮮へ派兵せし清兵の退却を防禦すべしと、勅諭を下したりとの説あり、又清国皇帝へ奉呈する献上品を携帯する朝鮮より派遣せる使節として、多数の朝鮮人天津に到着せり、又本日受取りたる北京発電報に曰く、平壤の敗報当地に着するや、北京人民は挙て驚き恐れ、色を失ふの状況を現したり

九月三十日、午後〇時卅五分東京発、同午後五時五十分平壤着

本日上海発の電報に、清兵の悉皆朝鮮を去れり、之か爲めに北京の人心洶々たり

九月三十日午後五時廣島大本營發、十月一日午前〇



時四十分平壤着

信ずべき報告に依れば、呉大倣は現今直隸湾の各防壁を檢閲中にして、李鴻章は親征に決し、其本營は芦台ならんと

支那南部の新募兵は、大運河によりて日々天津方向に輸送す、又、芝罘不及威海衛附近には益々兵数を増加し、満州騎兵同八旗の大部は鴨緑江に向ひ前進せりと

鎮遠号の修理は数日を要し、其他四艦の軍艦も甚しく損傷せりと

佛国公使館附騎兵中尉ド・ラブリーは原田歩兵大尉(輝太郎)と共に軍事視察として来る筈なりと

十月二日恩賜煙草及酒(十五本一合)拝戴す、万歳の声大に起り天明に及べり、

十月三日平壤の東北院峴を出発し、義州街道を順安に向けて出発したり、行程六里、露營す、桂師團長は前進せらる

十月四日肅川府に至る露營す、行程六里半

此行軍中も順安平壤間に等しく敵の死屍処々に散在し、腐臭堪へざらしめたり、道路は紅鬆土と云ふよりも寧ろ泥質にして概して大道路なり、第五師団及軍司司令部は明

日出発して義州に至ると傳聞せり

十月五日 安州府に着し舎營す、行程六里

安州府は戸数三千以上ありて大祖廟あり、周壁を繞らしたる旧城地なり、此地にも八大門あり、細柳門・玄武門・望日門・西門・建仁門・上鹵門・信義門・永安門・平安門と云、府の東南に栗山あり、中紅亭屹然たり、彩色已に脱せんとするも尚美觀を存す、万里長城的に作りたる袁世凱計画の新堡壘あり、聞く、平壤の陥るや、守兵謬り傳て曰く、日本兵背後に迂回せりとて、大狼狽して此堡を捨て立見枝隊をして安全に之を占領せしめたるこそ笑止なれ、

府民は清兵の略奪に遭ひ、一旦遁逃せしも、我兵の至るや漸次帰來するに至れり、土人李龍植リョンシキなるものあり、年二十才に満たず、稍文筆あり、我居所叔父の家屋なりとの故を以て、日々來りて我用を便せり、曰く、我十九才にして三才の女子あり十一才にして娶れり、妻は二十三才なり、嘗て仁川に遊び専ら商を以て家を立つ

十月六日 安州滞在

李來り遊ぶ、依て共に中紅亭に散步す、当時の荒廢を嘆ずる所、少く氣概あるものの如し

十月七日 安州滞在

旅団長より武蘭酒二瓶を送らる、李また来り遊ぶ

十月八日 安州滞在

此日赤飯を作り米食の補ひをなせり、李をして野菜少許を辨せしむ

李一千年前古銭一個を贈り曰く、我の珍とする所聊か犒軍の意を表すと、蓋し家屋を荒らされざるの用意なり、此銭は一厘錢なり

十月九日安州滞在

当地の氣候は概して日中酷暑にして夜間寒し、韓人の家は床下を煖め得るの装置あるを以て、頗る便なり、然れども赤痢は尚流行し、聯隊に五六十名の患者あり

当地に当時栗頗る多し、却て鶏を得たり、乃ち百文(我二十五錢)にて三十三羽を買収し、又、鯉の干物を求むる事を得たり、近傍の野菜を取り山塩にて之を新漬となす、然れども隊より支給せらるる副食物は生味噌と切昆布のみ、追送品は依然到着せず、兵卒は尚夏服を着す

十月十二日午後二時安州発信

当地滞存も全く糧食準備の關係にて兵卒までも運搬夫に化けせしめ候、此運搬力の事は後日大に研究すへき価値あるものと存候、然れども今兩三日中には進發の事と存居候

食品の欠乏は最早申上くる迄に無し、之が為にもあらざるべけれど、赤痢の蔓延には寒心に不堪候、栗オコシを病兵見舞にもと存じ、行商人を幸に買求め候所、二錢位のもの一個拾五錢とは驚き入申候、此の如き奸商は間もなく駆逐と存居候

已に冬衣と相成候にも係らず、蠅は蚊の如く聚り申候、一日之を一室に集め煙り攻めに致候て、二升位も打倒し申候

今日迄は分捕米なりし所、本日より日本米を支給され、顎が落ちざるかと存候位味善く感じ申候

十月二十四日午後一時義州発信

十月十四日午前六時三十分安州出發、博川郡に至る、行程四里半

安州滞存は意外に長引きしも、当時後方勤務の多忙は言語に絶したりと聞けり、要するに朝鮮内地の運搬困難は、後來尤も注意を要すべき所にして、殊に二師団以上を運転するには、格別の設備を要すべき事と知られたり、清川江は安州の北にあり、水深く橋なし、軍橋によりて渡過す、河巾は時により異にするも、目下二百米もあり此地に於て先發隊は砲四門を拾ひたり、其砲身は清川江へ投げ込まれたり、製式はクルップなり、聞く、安州に

ありし敵は、平壤の敗ヲ聞き大に恐れ、此川を渡らんとして溺死するもの頗る多し、是は第十八聯隊が順安を奪ひしを聞きて、直ちに安州の背後に出てたりと喧伝し、一層の困乱を来したるなりと云、此渡過の競争の為、舟一艘は沈没するに至りしが、我工兵隊の尽力により引揚げ、目下之を利用せり

清川江の河礫は凡そ一里もあり、石少く砂多し、海濱の趣きあり、此川は二條に分れその中間島嶼に敵の堡壘あり半成なり

安州より北行三里にして津頭と云戸数約一千悉く烏有に歸せり、この地は

亀城、定州の交叉点に属し殷富の地なりしに、清兵敗走の際、之に放火せしものなりと云

十月十五日博川郡を出発す、此地より第三大隊は雲山郡の方向を進み、雲山支隊と云ひ我第一大隊は軍隅支隊となる

博川郡より凡そ四里行程にして醉興里と云、是辺より軍隅附近に至る間は高山の頂上に堡壘あり、山腹には鉢巻形に砲壘線あり、皆曰く、敗兵の據点ならんと、其築造方は概ね古式に則る、彼の山上に旗幟を立て、周囲より弓箭刀槍を以て逼りし当時においては多少要害にてもあ

りしならんも、今日の銃砲にては丁度善き目標を表示したるに等しく、有害利あらざるの構築と評する外なし

軍隅は戸数十四五にして中隊二百人を容るゝに僅に二軒を充てられたるのみ

露營の設置をなせり、漸次寒気に向ふの日は、豚小屋にても屋下に入りたき心地せり

醉興里の西北一里、俗興里と云、此地に一の木碑あり、大日本大人恩恵不忘碑と記し、土人集団して軍隊の行進を見る、歓迎か歓送か、土人の言に曰く、去月十八日清兵五百、乱暴しつつ義州方面に退却せりと

本日程凡そ六里

十月十六日亀城府に至る行程六里半

同 十七日亀城府に滞在す

此府の周囲は彼は一里以上にして山谷を通して一連に城壁を囲らせり、此地に中軍屯營あり、孔子廟あり、人家は凡そ千二百以上を算す

府の中央より稍東北高丘上に孔子廟あり、礼服にあらざれば入るを許さざる所なり、本殿と拝殿とに分かつ、宛然觀音寺風の造り方なり、大成殿と記せる額を掲げたり、本殿には木牌「孔子」の如きを安置す、殿中一の裝飾なし、廢寺に位牌一個あるに等し、孔子も是に至りて陳蔡

の嘆あるや否や

朝鮮人には四種の人品あり、上士・中人・商人及び下等の農民なり、中人は中等の官員なり、中人朴準厚なるものあり、豊面肥軀髭鬚長く垂れて一幅画中の人たり、此人曰く、両国兄弟之國也、故に日本錢も亦朝鮮國に通用すと人民に諭せりと、

○此日朝鮮酒を飲む、白酒に少々酢を混じたるものと同じ、蓋し新焼酎なりと、当地病人多し、病家を除きて悉く軍隊に徵発す、雲山支隊も亦龜城府に來り合宿す

○儀式莊嚴にして赤衣の人輿に乗り來る、數十人皆下坐して之を送迎す、其通行には何か喝するが如し、宛然幕府時代の殿様行列なり、各人家に至り、凡そ二三分にして出て去る、曰く、勅使なりと、曰く醫師なりと、遂に其何たるを知らず

○此地の氣候は日本秋田と同一緯度の下にあり、傳聞する所次の如し

敵は今尚鴨綠江の彼岸にありて、兵糧六ヶ月を蓄積す  
第二軍大山大將は、去る十日日本邦を出發せりと

十月十八日龜城出發、希易洞に至り、宿泊す、行程七里  
龜城以西は山嶽重疊し其間に点在する里、洞、店と名くべきものは、悉く三四戸の小部落なり

○青竜嶺は馬息嶺に比すべき險山にして、其登降極めて陰なり、此山は大木叢生し、往々立枯れをなせり、小青竜嶺の頂上に顕叢祠あり、何を祀れるやを詳にせず

○草幕嶺の東に屯兵里、操練洞あり、亦植松鎮と名く小村あり、万里長城的の石壁ありて山谷に連綿す、今は大に破壊せしも、厚さ二間半、高二間半（時により一間位）あり、古の大城なりしならん

○亭子山峴嶺より小なるものと思ひしに、中々大峠にして、殊に下り坂は極めて急峻なり

此日午前六時出發、六里半の行程に十二時間を費し、人馬疲労して目的地たる新成里に達する能はず、僅に人家を尋ねて露宿せり、地名不詳、如此にして夜十二時初めて眠に就けり

十月十九日 亭子里店に宿營す  
前日の○印は本日分なり

本日は、前日の疲労ある上に、祖岳嶺に屯軍嶺・草幕嶺・亭子山峴ありて、為に大行李は容易に到着せず、六里半の行程にて、大行李の炊爨分配は翌午前一時なり、副食物は僅かに焼塩あるのみ

市川中尉は足を痛め、川崎大尉は腹を痛む、余及野元見習士官のみ頑然たり、

十七日以後は朝霜漸く深く、今朝の如きは白霜庭上に満ちて一望白色なり、川には氷を結む、然れども日中は尚八十度の気温あり、故に感冒赤痢は漸次増加し、入院増加す、余等は実に鶏を携へつゝ、行進しあるなり、

十月二十日白馬山城に達す、行程五里

二個の山峴を越へしのみ、鴨緑江には二里の近きにあり、軍司令部は此地に置かる、第三師団長及大迫旅団長は所串館とて北へ一山を越へて義州街道上にあり、我第二大隊は三老巨と云ひて一里と一山を巨て、第一・第三大隊は白馬山城外の村落に宿営す

十月二十一日 白馬山城 滞在

今朝山縣中尉と中尉遠山景徳は、将校斥候として鴨緑江へ出発せり

第十八聯隊中尉岩本績に出会す、同人曰く、余等は義州北方水口鎮にあり、清兵は五六人づゝ、對岸を散歩す、水口鎮の北、玉口鎮には敵を見ず

白馬山城の頂上よりは敵の城堡を望見し得べし

本日珍らしく日本の里芋を求めたり、極めて珍、亦豆腐を求めたり、何分銀貨や紙幣の通用せざる為物品購買の途に窮す

聞く所にては、龍川と云ひ、白馬山を去る四里の所には、

我運送船到着するを以て、今後は運搬便利となるに至らん

本日午後二時一等軍曹若原龍太を下士斥候として派遣す

(未完)

